

## スジキリヨトウの生態雑記<sup>1)</sup>

森本輝一・大平喜男・松沢寛  
(香川大学農学部)

近年各地にゴルフ場が急増し、また都市近郊におけるシバの植栽も非常に目立つようになったが、かなり以前から予想されていたように、シバの害虫スジキリヨトウ *Rusidrina depravata* BUTLER が問題になり始めた。われわれの研究室でも、近年しばしばその関係の問題を持ちこまれたり、被害現場の実地踏査を要請されたりしてきた。以下に手元のノートをもとにして、本種の一般生態について若干述べ参考に供したい。

### 1 生活史の概要

本種成虫は灰色を帯びた淡茶色で、体長は11~16mm、翅の開張は26~36mmである。雄の触角は櫛歯状を呈し、容易に雌と区別できる。香川県では、5月になると多数の成虫が出現し、灯火にて飛来するが、その頃さかんに交尾産卵をなして増殖しはじめる。

産卵は主としてシバの葉先に小卵塊(表面は柔かい鱗毛で覆われる)をなして行なわれるが、1雌の産卵数は200~400、平均300卵である。3~5日をへてふ化した幼虫は、直ちに新葉に移り、さかんに食害を始めるが、3令になると体は急に黄味を増し、かなりはっきりした本来の幼虫の色彩斑紋があらわれる。成長しきった幼虫は、体長25mm内外、淡茶色をしているが、背面中央および両側には、白味を帯びた縦縞をあらわす。また、亜背線に沿って、各節には、黒色の半月紋を装う。内藤(1970)のいうように、全体として一見アワヨトウ *Leucania separata* WALKER に類似するところもあるが、体の前後端が急に細まり、ズングリした形態を呈する。

幼虫期間は夏(7月)は20~28日、平均24日位であるが、その間6令を経過する。各令の経過日数は、6令期を除いて大体3~4日、6令期のみは個体差が多くて4~10日、平均5.6日である。また前蛹期はほぼ1日、蛹期は7~8日である。蛹化に際しては、地中に浅く土窩を作り、その中で蛹になる。

本種の1年間の発生回数は、香川では恐らく4回と思われるが、現在はまだはっきりしたことはいえない。成虫の発生期は大体5月、6月下旬~7月中旬、7月下旬~8月中旬、8月下旬~9月下旬の4回、幼虫の出現加害期は6月上旬~7月上旬、7月、8月、9月中旬~10月上旬である。

越冬は老熟もしくはそれに近い幼虫態で行ない、芝生の根元に浅く潜伏している。

ゴルフ場や造園師のところへは、各地のシバ業者から注文に応じてシバが送られてくるが(香川県には、主として鳥取県下の業者から多く運ばれてくる)、それらのシバの中には、四季を通

---

1) An ecological note on the Japanese lawn-grass cutworm, *Rusidrina depravata* BUTLER (Lepidoptera, Noctuidae). By Teruichi MORIMOTO, Yoshio OHIRA and Hiroshi MATSUZAWA.

じて卵や幼虫がくっついてくるのが実情で、冬季には越冬幼虫が潜伏したまま送られてくることが多い。このような状況であるので、今日広く各地に本害虫が多発し問題になってきたことは、むしろ当然といってよいであろう。参考までに、本種の生活環の概要を示せば、第1表のようである。

第1表 スジキリヨトウの生活環 (香川, 1972)

JAN.	FEB.	MAR.	APR.	MAY.	JUN.	JUL.	AUG.	SEP.	OCT.	NOV.	DEC.
LLL	LLL	LLL	LLL PP A	PP AAA EEE LL	E LLL PP A E	PA AA EEE LLL P A	L P AA EEE LLL P A	PP AAA EEE LLL	A E LLL	LLL	LLL

A: 成虫, E: 卵, L: 幼虫, P: さなぎ

## 2 発 育 に つ い て

本種の各種温度条件下における发育速度の比較はまだ実施していないが、夏季(7月)室温下での飼育ならびに25℃定温下での飼育成績を示すと第2表のようである。比較的发育の速い昆虫のようである。

第2表 スジキリヨトウの发育所要日数

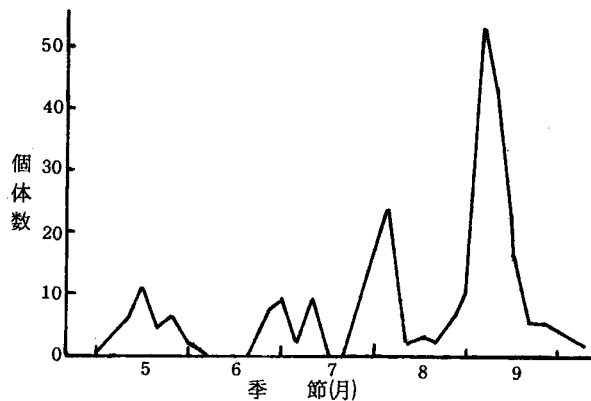
ステージ 温度	卵	幼 虫							さなぎ	
		1令	2令	3令	4令	5令	6令	前よう		
定温 (25℃)	4	3	3	3	3	3	4-10	1	7	
室温 (7月)	3	21-29 (A) 26-29 (B)								

(A): 個体飼育(N=27) (B): 集団飼育(N=20)

## 3 灯火にたいする成虫の飛来消長

本種は灯火に飛来する性質がよい。1971年5月上旬から11月までの間、香川大学農学部構内の6基の水銀灯ならびに1基の青色誘蛾灯合計7灯に飛来した本種成虫の個体数(合計)を半旬ごとにまとめた成績は第1図のようである。

すなわち、この年香川(三木町)では、5月、6~7月、7~8月、9月に顕著な発生の山を示し、しかもそれらの山は、世代が進むにつれて次第に高くなり、9月の山はとくにいちじるしかった。1972



第1図 スジキリヨトウ成虫の灯火への飛来消長 (香川大学農学部構内, 1971)

年にも構内5灯の水銀灯を利用して同様の観察を行なったが、1971年の成績と大同小異で、とくにここに図示することは省略した。また、これらの成績は、大熊ら(1972)の研究発表の中にも含まれた本種についての成績ともかなりな類似が認められた。

## 引 用 文 献

内藤 篤(1970): 農業研究, 16: 26~30.

大熊衛ほか(1972): 昭和47年度四国植防研究発表会, 香川県善通寺市, 11月21日.

(1973年1月31日 受領)